平成３０年度 月刊サイ 校長通信７号

（生徒・保護者版） H30.10.30（１０月号）

俊英NOW

●ＰＴＡ父母デー　本校ＯＢ中村勝彦さん講演会「自分と向き合う勇気」

日本プロ野球組織、国際部部長兼運営統括部長中村勝彦さんのお話をうかがいました。中村さんは、本校卒業後日本体育大に進学、青年海外協力隊としてコスタリカに赴任し、帰国後日本プロ野球組織に入り現在に至っています。日本シリーズの企画などプロ野球の運営の中心を担っています。高校で始めた野球部では竹ざおをひたすら振らされ、はじめての公式戦で奇跡のホームラン‥‥そんなエピソードを散りばめながら人生の岐路において困難から逃げず、勇気を持って自分に向き合うことの大切さを語っていただきました。

●新生徒会執行部へ引き継ぎ

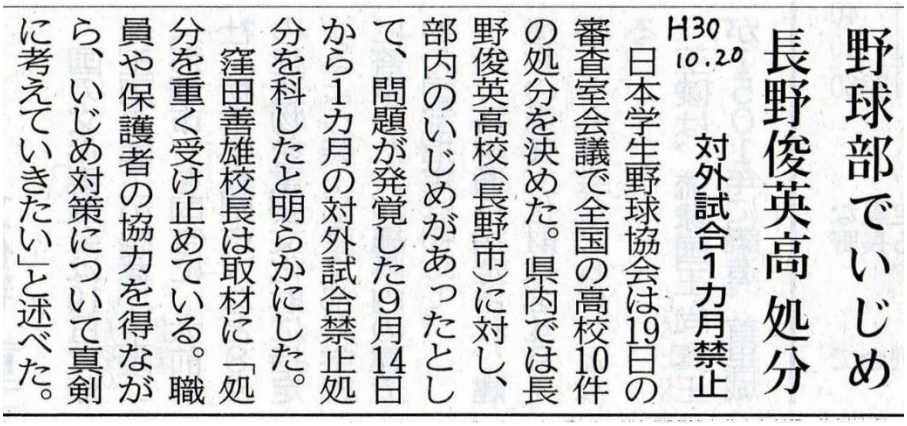
生徒会長　髙橋　颯希　君(2-6)
副会長　柳澤　智香子さん(2-2)
　　井出　雄治　君(2-3)
書　記　　青木　輝　君(2-5)
　　小野澤　小春さん(2-6)
会　計　　宮下　大生　君(2-3)
　　鈴木　桃　さん（1-2)
議　長　　倉澤　僚透　君(2-1)
副議長　　佐々木　尚　君(1-2)

俊英高校のリーダーとして、ブランドとして期待しています。

●本校野球部への処分について

本校野球部内でいじめ問題が発生し、高野連に報告しましたところ、対外試合禁止１ヶ月の処分を受けました。深くお詫び申し上げます。処分を重く受け止め、いじめ防止にこれまで以上に努力してまいります。

（10.20 付信濃毎日新聞より一部掲載）



H30 10.20

野球部でいじめ
長野俊英高 処分
対外試合1カ月禁止

日本学生野球協会は19日の審査室会議で全国の高校10件の処分を決めた。県内では長野俊英高校(長野市)に対し、部内のいじめがあったとして、問題が発覚した9月14日から1カ月の対外試合禁止処分を科したと明らかにした。

窪田善雄校長は取材に「処分を重く受け止めている。職員や保護者の協力を得ながら、いじめ対策について真剣に考えていきたい」と述べた。

校長ESSAY

いやな話

茨城県水戸市に千波（せんば）湖という湖がある。大名庭園として名高い偕楽園に隣接し、毎年 120 羽ほどの白鳥や黒鳥が飛来して市民の憩いの場になっている。今から 10 年前の 2008 年 4 月 28 日早朝、千波湖の岸辺で、白鳥と黒鳥あわせて 7 羽が死んでいるのを散歩中の市民がみつけた。7 羽はすべて首を折られ、血だらけになって散乱していたのである。何者かが、おそらく棒のようなもので激しく首をなぐって殺したと思われる。水戸警察署の捜査が入り、目撃情報から二人の男子中学生（中 3 生 15 歳、中 2 生 13 歳）の犯行と判明した。二人の少年は、鳥獣保護法違反の非行事実で水戸家庭裁判所に書類送致された。取調べに対して少年たちは、「ゲーム感覚でやった。」「羽を広げて抵抗してくる鳥を棒でなぐって殺すのが楽しかった。」などと供述した。

子育て中の白鳥は、人が近づくと卵やヒナを守ろうとして羽を広げて迫ってくる。その鳥たちの首を棒で思い切りなぐって殺していたのである。親鳥を失って、さらにヒナや卵が犠牲になったのは言うまでもない。裁判官は、「生命に対する憐れみを一切感じさせない犯行で残酷であり、少年の問題は極めて深刻」と指摘し、初等少年院への長期収容が相当とした。二人の少年は、今 20 歳代前半の青年となっているはずだが、今どんな人生を過ごしているのだろうか。

この話は、去年、全校集会の校長講話で話したことがある。また、反省解除の校長説諭で触れることも多い。自分はこのニュースを知ったとき何とも形容しがたい「いやな気分」と「強い憤り」に捉われた。この気持ちは、おそらくすべての生徒諸君も共有してくれているものと思っている。

しかし、二人の中学生の残虐行為は、常軌を逸した異常な事件に見えながら、よく考えてみると「いじめ」とまったく同じ構造を持っている。いじめは、加害側と被害側の間に、はじめから圧倒的な力の差が存在し、強い立場にある者が、無責任でふざけた「へらへら」した雰囲気のなかで、継続的に理不振な暴力、威圧、誹謗、中傷、からかいを繰返して被害者を追い詰めていく。こうした「いじめ」の実態は、抵抗するすべのない白鳥たちを「ゲーム感覚で」「楽しく」虐殺していた中学生の残虐行為と構造的に全く同じではないか。

水戸の中学生の心無い行為を紹介すると、すべての人がいやな気分や憤りを表明してくれる。ところが、その同じ人が、全く無自覚なまま、軽いノリでからかい行為やおふざけパンチなどを続け、知らず知らずのうち相手を深く傷つけていたという事案が何度かあった。誰もが「思いやり」とか「良心」と呼ばれる素晴らしいものを心の内に持っているはずなのに、ふざけ半分、無責任、無自覚な生活を続けているとその素晴らしいものを失ってしまうことがあるのだ。思えば恐ろしいことである。もう一度、よく考えてみよう。集団の中に「へらへら」したふざけた空気が流れていないか。人の真剣さを茶化すような雰囲気が存在していないか。もし、そうだとすれば、それは絶対に正さなければならない。なぜなら、そうした雰囲気こそが、水戸の中学生が落ち込んでいった心の闇へ君たちが落ち込んでいく第一歩だからである。・・・・私は、皆さんの「良心」に期待したいのだ。